

サロンコンサート  
シューベルト 『白鳥の歌』

**Le Salon de Clavier**

**2021年9月26日**

**15:30 開演 (15:00 開場)**

## 1. Liebesbotschaft

Rauschendes Bächlein,  
So silbern und hell,  
Eilst zur Geliebten  
So munter und schnell?  
Ach trautes Bächlein  
Mein Bote sei Du;  
Bringe die Grüße  
Des Fernen ihr zu.

All' ihre Blumen  
Im Garten gepflegt,  
Die sie so lieblich  
Am Busen trägt,  
Und ihre Rosen  
In purpurner Gluth,  
Bächlein, erquicke  
Mit kühlender Fluth.

Wenn sie am Ufer,  
In Träume versenkt,  
Meiner gedenkend  
Das Köpfchen hängt;  
Tröste die Süße  
Mit freundlichem Blick,  
Denn der Geliebte  
Kehrt bald zurück.

Neigt sich die Sonne  
Mit röhlichem Schein,  
Wiege das Liebchen  
In Schlummer ein.  
Rausche sie murmelnd  
In süße Ruh,  
Flüstre ihr Träume  
Der Liebe zu.

## 1. 愛の知らせ

せせらぐ小川よ、  
こんなにも明るい銀の小川よ、  
僕の愛する人の元へ急いでいるのかい、  
こんなにも息を弾ませて足早に。  
ああ、親愛なる小川よ、  
僕の使者になってくれ。  
便りを運んでくれ、  
遠くからの便りを彼女の元へ。

彼女の花はみな  
庭で大事にされていて、  
彼女はなんとも可愛らしく  
それを胸につけている、  
そして彼女のバラは  
深紅に燃え上がる、  
小川よ、冷やしてやってくれ、  
つめたい水の流れて。

彼女が岸辺で  
夢のなかへ沈み込み、  
僕を想って  
うなだれていたなら、  
可愛いあの子を慰めてくれ、  
優しいまなざしで。  
彼女が想う人は、  
もうすぐ戻ってくるのだから。

太陽が傾いて  
赤いかがやきが差し込んだら、  
愛する人をゆすってやってくれ、  
まどろみの中にいる彼女を。  
さらさらとせせらいでくれ、  
甘い安らぎの音を立てて。  
夢を彼女に囁いてくれ、  
愛の夢を彼女に。

詩:レルシュタープ / 和訳:河野泰佑

## 2. Kriegers Ahnung

*In tiefer Ruh liegt um mich her  
Der Waffenbrüder Kreis;  
Mir ist das Herz so bang und schwer,  
Von Sehnsucht mir so heiß.*

*Wie hab ich oft so süß geträumt  
An ihrem Busen warm!  
Wie freundlich schien des Herdes Glut,  
Lag sie in meinem Arm!*

*Hier, wo der Flammen düstrer Schein  
Ach! nur auf Waffen spielt,  
Hier fühlt die Brust sich ganz allein,  
Der Wehmut Träne quillt.*

*Herz! Daß der Trost dich nicht verläßt!  
Es ruft noch manche Schlacht.  
Bald ruh ich wohl und schlafe fest,  
Herzliebste - gute Nacht!*

## 2. 戦士の予感

深い安らぎの中、僕を取り囲む  
戦友たちの輪。  
僕の心はこんなにも不安で重苦しい、  
僕を熱くする憧れによって。

どれほど僕はうっとり夢見ただろう、  
彼女のあたたかい胸を！  
どれほど優しく暖炉は灯るだろう、  
僕の腕のなかに彼女がいたら！

炎が薄暗く光るこの場所では、  
ああ！武器だけが戯れているんだ。  
この場所でこの胸に孤独を感じて、  
憂いの涙が溢れ出すんだ。

心よ！癒やしがお前から去らぬよう！  
まだ幾多の戦いが待っている。  
もうすぐ僕は安らぎ覚めない眠りにつくだろう、  
心から愛する人よ、おやすみなさい！

詩:レルシュタープ / 和訳:河野泰佑

## Point 1 成立について

シューベルト作曲『白鳥の歌』は 14 曲の歌曲からなる歌曲集です。

同時代に作られたドイツの歌曲集は、複数の歌曲がストーリー性や関連性を持ってつながっている「連作歌曲」も多いですが、『白鳥の歌』はシューベルトの晩年の作品が、彼の死後に集められてできた歌曲集です。

そのため、それぞれの曲の関連性はなく、独立して各々の世界観を持っているという特徴があります。

音楽がつけられられた元の詩も、3 人の詩人によるもので、7 曲がレルシュタープ、6 曲がハイネ、1 曲がザイドルの詩によるものです。

シューベルトが施した音楽表現が、それぞれの詩人ごとに違ったものになっていることもこの作品の見どころです。

#### 4. Ständchen

*Leise flehen meine Lieder  
Durch die Nacht zu dir;  
In den stillen Hain hernieder,  
Liebchen, komm ' zu mir!*

*Flüsternd schlanke Wipfel rauschen  
In des Mondes Licht;  
Des Verräthers feindlich Lauschen  
Fürchte, Holde, nicht.*

*Hörst die Nachtigallen schlagen?  
Ach! sie flehen Dich,  
Mit der Töne süßen Klagen  
Flehen sie für mich.*

*Sie verstehn des Busens Sehnen,  
Kennen Liebesschmerz,  
Rühren mit den Silbertönen  
Jedes weiche Herz.*

*Laß auch dir die Brust bewegen,  
Liebchen, höre mich!  
Bebend harr' ich dir entgegen!  
Komm ', beglücke mich!*

#### 4. セレナーデ

僕の歌は静かに訴えかける  
夜闇を抜けて君のもとへ。  
この静かな森のなかへ、  
愛する人よ、こっちへおいで。

細いこずえは囁くようにざわめく  
月の光のなかで。  
見張りが盗み聞きしていようと  
恋人よ、恐れないで。

ナイチンゲールのさえずりが聞こえるかい？  
ああ！彼らは君に訴えかけているんだ、  
うっとりするような嘆きの声で  
僕のために君に訴えかけているんだ。

彼らは胸の内の憧れをわかっていて、  
恋の苦悩も知っていて、  
銀色の声で揺さぶるんだ、  
誰しもの脆い心を。

君の胸も動かしてくれ、  
愛する人よ、僕の声を聴いてくれ！  
僕は震えるほどに待ち焦がれているんだ！  
僕のもとへ来て、喜びをもたらしてくれ！

詩:レルシュタープ / 和訳:河野泰佑

## Point 2 作品の様式について

シューベルトの作風は古典派時代とロマン派時代のちょうど間。

モーツァルトやベートーヴェンといった古典派の作品は、貴族や身分の高い人たちが楽しむために作られた、整然とした形式の美しさを持った音楽です。

それに対してロマン派の作品は、個人が自らの内面を音楽という形で表現した芸術です。形式を守ったり、古典派的な和声の進行のルールの中で作曲するというよりも、感情を音楽で表すことを重視しているため自由で直感的という特徴があります。

## 14. Die Taubenpost

*Ich hab' eine Briefftaub' in meinem Sold,  
Die ist gar ergeben und treu,  
Sie nimmt mir nie das Ziel zu kurz,  
Und fliegt auch nie vorbei.*

*Ich sende sie vieltausendmal  
Auf Kundschaft täglich hinaus,  
Vorbei an manchem lieben Ort,  
Bis zu der Liebsten Haus.*

*Dort schaut sie zum Fenster heimlich hinein,  
Belauscht ihren Blick und Schritt,  
Gibt meine Grüße scherzend ab  
Und nimmt die ihren mit.*

*Kein Briefchen brauch' ich zu schreiben mehr,  
Die Thräne selbst geb' ich ihr:  
O sie verträgt sie sicher nicht,  
Gar eifrig dient sie mir.*

*Bei Tag, bei Nacht, im Wachen im Traum,  
Ihr gilt das alles gleich:  
Wenn sie nur wandern, wandern kann,  
Dann ist sie überreich!*

*Sie wird nicht müd, sie wird nicht matt,  
Der Weg ist stets ihr neu;  
Sie braucht nicht Lockung, braucht nicht Lohn,  
Die Taub' ist so mir treu!*

*Drum heg' ich sie auch so treu an der Brust,  
Versichert des schönsten Gewinns;  
Sie heißt - die Sehnsucht! Kennt ihr sie?  
Die Botin treuen Sinns.*

## 14. 鳩の便り

僕は伝書鳩を雇っていて  
そいつはえらく従順で忠実だ。  
宛先にたどり着かないことも  
飛び越してしまうことも決してない

僕はそいつを何千回と送り出して  
毎日のように文通したんだ。  
たくさんの素敵な場所を通して  
愛する人の家まで。

そいつはひそかに窓を覗き込み、  
彼女の視線や足音に気づいたら、  
僕の便りをおどけたように渡して、  
そして彼女のをもち帰る。

もう手紙を書く必要もないだろう、  
僕は涙そのものをそいつに託すから。  
ああ、涙を運べるかわからないけれど  
本当に熱心に働いてくれる。

昼でも夜でも、起きてても夢の中でも  
鳩には全部同じだ。  
飛んでいるだけで、飛べるだけで  
そいつは満たされるのだから！

そいつは弱らないし疲れないし、  
飛ぶ道はいつでも新鮮だ。  
見返りも求めず、お金も求めず、  
この鳩はなんて忠実なんだろう！

そして僕もそいつを信じている、  
すてきな事があると確信して。  
鳩の名は「憧れ」！知っていたかい？  
忠実な心をもつ使者なんだ。

詩: ザイドル / 和訳: 河野泰佑

## 8. Der Atlas

*Ich unglücksel'ger Atlas! eine Welt,  
Die ganze Welt der Schmerzen muß ich tragen,  
Ich trage Unerträgliches, und brechen  
Will mir das Herz im Leibe.*

*Du stolzes Herz! du hast es ja gewollt,  
Du wolltest glücklich sein, unendlich glücklich  
Oder unendlich elend, stolzes Herz,  
Und jetzo bist du elend.*

## 10. Das Fischermädchen

*Du schönes Fischermädchen,  
Triebe den Kahn ans Land;  
Komm zu mir und setze dich nieder,  
Wir kosen Hand in Hand.*

*Leg' an mein Herz dein Köpfchen,  
Und fürchte dich nicht zu sehr,  
Vertrau'st du dich doch sorglos  
Täglich dem wilden Meer.*

*Mein Herz gleicht ganz dem Meere,  
Hat Sturm und Ebb' und Fluth,  
Und manche schöne Perle  
In seiner Tiefe ruht.*

## 8. アトラス

俺は不幸なアトラス！この世界を、  
苦しみの世界を、俺はすべて背負うのだ、  
耐え難きを俺が背負い、そして  
この肉体のなかで心など碎けてしまえ。

誇り高き心よ！お前は望んでいた、  
幸福を、永遠の幸福を望んでいたのだろう、  
あるいは永遠の惨めさを。誇り高き心よ、  
こうして今、お前は惨めなのだ。

詩：ハイネ／和訳：河野泰佑

## 10. 漁師の娘

きれいな漁師の娘さん、  
船を岸へ漕いで、  
僕のもとへ来て、腰をおろして  
手を取り合って愛を語ろう。

頭を僕の胸にもたれて、  
何も恐れないで。  
君は自分を信じ切っているじゃないか、  
荒れ狂う海の毎日でも。

僕の心も海と全く同じで、  
嵐もあれば、潮の満ち引きもある、  
そしてたくさんのきれいな真珠が  
その深いところには眠っているんだ。

詩：ハイネ／和訳：河野泰佑

## Point 3 『白鳥の歌』の様式について

シューベルトの初期の歌曲作品は、校歌のように1番2番3番...といった歌詞が違うメロディーの繰り返しがある「有節歌曲」という形式が主です。

素朴な民謡風で、シューベルト初期の作品はこの形式が多く見られます。

『白鳥の歌』ではザイドルの詩による"Die Taubenpost"は一貫したリズム形を持ち、シューベルトの歌曲の中でも有名な「ます」や「野ばら」といった有節歌曲と似た作風になっています。

『白鳥の歌』はシューベルトの晩年の作品を集めたものなので、全体的には古典派というよりロマン派の様式に寄っています。

したがって、形式的なものがはっきりしているものが少なく、ロマン的な詩のテキストが持つ内面表現を音楽でも自由に表現しているという特徴があります。

中でもハイネの詩による6曲はロマン派的な色合いが強く、旋律の起伏が少ない語り風の歌い方で詩を聞かせる、シューマンやヴォルフに継承される作曲手法が用いられています。

## 12. Am Meer

*Das Meer erglänzte weit hinaus,  
Im letzten Abendscheine;  
Wir saßen am einsamen Fischerhaus,  
Wir saßen stumm und alleine.*

*Der Nebel stieg, das Wasser schwoll,  
Die Möwe flog hin und wieder;  
Aus deinen Augen, liebevoll,  
Fielen die Thränen nieder.*

*Ich sah sie fallen auf deine Hand,  
Und bin auf's Knie gesunken;  
Ich hab' von deiner weißen Hand  
Die Thränen fortgetrunken.*

*Seit jener Stunde verzehrt sich mein Leib,  
Die Seele stirbt vor Sehnen;  
Mich hat das unglücksel'ge Weib  
Vergiftet mit ihren Thränen.*

## 13. Der Doppelgänger

*Still ist die Nacht, es ruhen die Gassen,  
In diesem Hause wohnte mein Schatz;  
Sie hat schon längst die Stadt verlassen,  
Doch steht noch das Haus auf demselben Platz.*

*Da steht auch ein Mensch und starrt in die Höhe,  
Und ringt die Hände, vor Schmerzengewalt;  
Mir graust es, wenn ich sein Antlitz sehe,  
Der Mond zeigt mir meine eigne Gestalt.*

*Du Doppelgänger! du bleicher Geselle!  
Was äffst du nach mein Liebesleid,  
Das mich gequält auf dieser Stelle,  
So manche Nacht, in alter Zeit?*

## 12. 海辺で

海は広く隅々まできらめいていた、  
最後の夕日の光のなかで。  
僕たちは淋しく立つ漁師小屋のそばに座った、  
僕たちは言葉もなく二人きりで座っていた。

霧が立ちのぼり、潮は膨れあがり、  
カモメが飛び交っていた。  
君の瞳は、愛情に満ちて  
涙をこぼれ落とした。

僕は君の手に落ちるのを見て、  
ひざをかかめた。  
僕は君のまっしろな手から  
その涙を口にした。

あの時から僕の身はやつれて、  
魂は切望のゆえに死んでしまいそうなんだ。  
その不幸な女は僕に  
彼女の涙で毒を盛ったんだ。

詩:ハイネ/和訳:河野泰佑

## 13. 影法師

僕は静かな夜、路地は静まり返っている  
この家に僕の最愛の人が住んでいた。  
彼女が街を去ってからもう長い、  
家は同じ場所にまだ立っているというのに。

そばに人が立っていて、上の方を見つめて  
苦悩しているかのように手を握っている。  
僕はぞっとした。彼の顔に視線を向けたとき  
月の光は見せた、僕に、僕自身の顔を。

影法師よ！青ざめた若者よ！  
お前はなぜ僕の悲恋を真似てみせるんだ？  
この場所で僕を痛めつけた悲恋を、  
むかし、幾晩も僕を痛めつけた悲恋を。

詩:ハイネ/和訳:河野泰佑